自　己　評　価　書

（平成２６年度）

平成２７年３月

鳴門教育大学附属中学校

目　　次

Ⅰ　学校の現況及び目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　評価項目ごとの自己評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

１．社会に生きてはたらく思考力等の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

２．いじめの撲滅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅲ　自己評価根拠資料一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

Ⅰ　学校の現況及び目的

１　現況

(1) 学校名　鳴門教育大学附属中学校
(2) 所在地　徳島市中吉野町１丁目 31 番地
(3) 学級等の構成
　１学年　４学級　　２学年　４学級
　３学年　４学級　　計 12 学級
(4) 生徒数及び教員数(平成 26 年５月１日)
　生徒数 463 人　　教員数 23 人（正規教員）

２　目的

(1)目的・使命

本校の目的は，附属中学校校則第１条において「小学校における教育の基礎の上に，心身の発達に応じて，義務教育として行われる普通教育を施すとともに，鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し，かつ，本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており，本校は義務教育を行う任務とともに，教員養成大学の附属中学校として，次のような使命をもった学校である。

①大学と一体となって，教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
②地域の教育諸課題の解明，参観者への指導・助言，文部科学省・県教委・地教委等教育関係機関からの要請による教員派遣など，教育界の発展に寄与する使命
③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命

(2)教育目標

本校は，校則第１条に示されている中学校教育の目的の達成のため，次の教育目標を掲げ，めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし，自主・自立の精神，創造的能力，豊かな人間性をそなえ，国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

○目標を持ち，自主的，創造的に学ぶ生徒
○強靭な意志と体をもち，たくましく生き抜く生徒
○優しく思いやりの心をもち，人につくす生徒

めざす教師像

○生徒を愛し，生徒とともに伸びる教師
○強い使命感，鋭い教育観をもった教師
○優れた指導力をもった教師

めざす学校像

○創造的な知性を磨く学問学校
○情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
○強健な身体を練る体育学校
○敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3)平成２６年度重点目標

鳴門教育大学との連携を密にし，中期目標・中期計画・本年度計画の実現に努めながら，次の２本柱６項目から教育目標の具現化を図る。

①社会に生きてはたらく思考力等の育成
②いじめの撲滅

(4)評価項目

①社会に生きてはたらく思考力等の育成

○「すべ」を活用した学習指導方法及び教材・教具等の開発
○ NIE（Newspaper in Education=学校などで新聞を教材として活用すること）の推進
○ＩＣＴ機器の効果的な活用

②いじめの撲滅

○コミュニケーション力を高める活動の充実
○いじめに関する調査の実施とその結果を踏まえた取組の充実（いじめ防止基本方針の遵守）

Ⅱ　評価項目ごとの自己評価

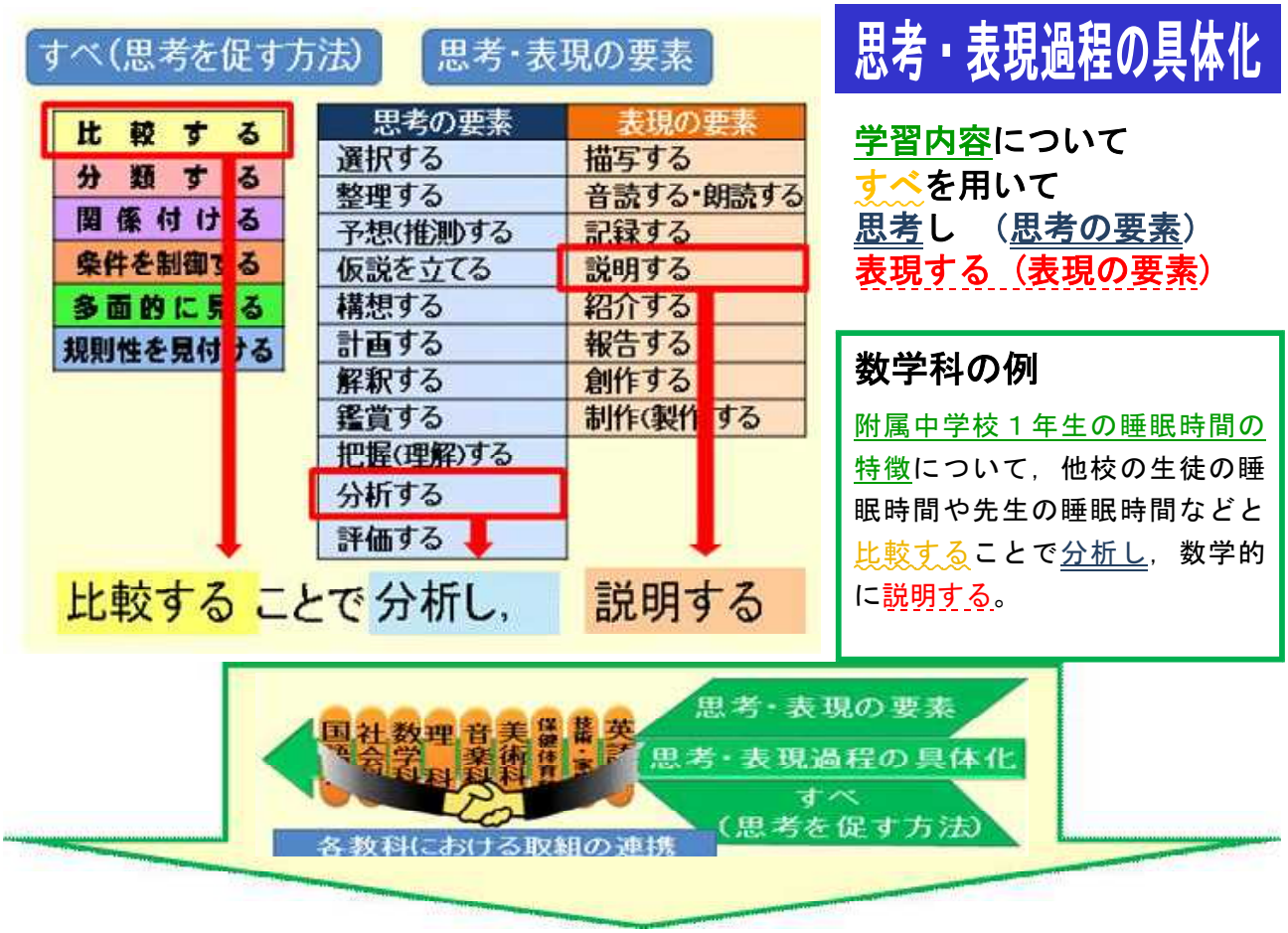
評価項目１　社会に生きてはたらく思考力等の育成

複雑で解決が困難な問題を，習得した知識と技能を活用して，思考し，判断し，仲間と協働して解決できる力を育成する。そのために，思考を促すための方法である「すべ」を習得させる。また，こうした授業のための学習指導方法及び教材・教具等を開発する。

１　観点ごとの分析

観点１－１　「すべ」を活用した学習指導方法及び教材・教具等の開発

(1) 学習指導方法の開発



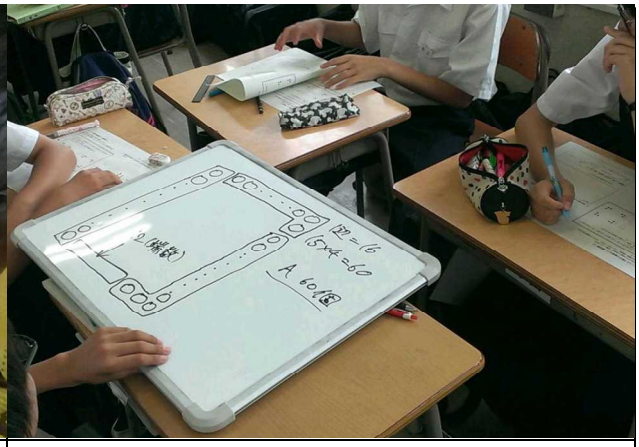
社会に生きてはたらく思考力・判断力・表現力の育成

６つの「すべ（手立て）」と「思考・表現の要素」を組み合わせて，生徒の思考・表現過程を具体化した。この思考・表現過程をすべての教科の授業で実践することで，生徒の言語活動を充実させるとともに，教科が連携して「社会に生きてはたらく思考力・判断力・表現力」を育成した。

(2) 開発した教材・教具の例

【ホワイトボードの活用①】

班員とよりよいチームプレイを思考し，説明し合い，チームとしての作戦を決定した。

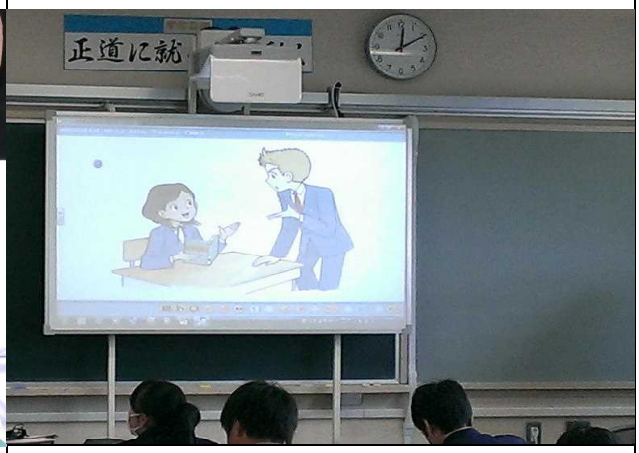


【ホワイトボードの活用②】

班員が協働して解決策を練り上げ，班としての考えを示した。

【タブレットの活用】

生徒スピーチ（英語）を Ipad に録画し，その動画についてチェック項目に基づき班協議した。



【デジタル教科書（電子黒板）の活用】

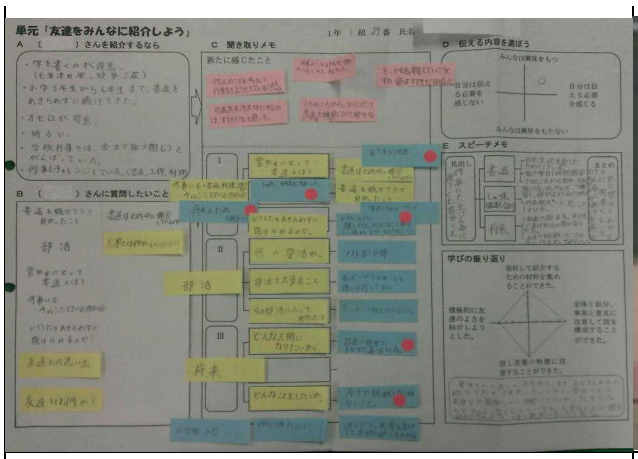
ネイティブの発音で聴いたり，静止画を元に説明文を考えたりするために教師用デジタル教科書を活用した。

【カードの活用①】

ペアを組んでいる生徒にカードに示した絵の場面を英語で説明した。

【カードの活用②】

社会の授業で問題の原因と考えられるいくつかの要素をカードにし，どの要素がどの要素に影響を与えているか思考し，班員に説明した。



【付箋紙の活用】	【実験装置の活用】
意見を付箋に書きワークシートに貼付することで，同じ意見や違う意見を色分けしたり，分類ごとにまとめたり，新しい発想で意見を並べ替えたりした。	水素の爆発実験を安全に行うことができる装置を自作した。

(3) 成果と課題

これからの社会で求められる能力は，複雑で解決が困難な問題の最適解を見出すことができるといった問題解決力である。このような問題解決には，教科の枠にとらわれずに学んだ全ての知識・技能を活用して，思考し，判断し，表現できることが重要である。こうしたことから，文部科学省教育課程研究指定校事業を受託し，鳴門教育大学はもとより教科調査官のアドバイスを得ながら，全ての教科で同じ学習スタイルにより問題解決的な学習指導（思考・表現過程の具体化）を徹底した意義は大きいと考える。

一方で，こうした学習指導を効果的に行うための準備や教材開発には多くの時間を費やしており，その分，勤務負担が伴ったり，生徒と向き合う時間の確保が十分ではなくなったりしている。

観点１－２　NIE（Newspaper in Education=学校などで新聞を教材として活用すること）の推進

(1) ＮＩＥの実践例

新聞記事をもとに考え，交流し，発信する取組として，３年生総合的な学習の時間の単元「徳島未来構想―模擬県議会をしよう―」を示す。

① 重層的な単元構成

１・２年生の実践，日常の新聞購読，各教科，特別活動における学びを統合して課題解決を図る単元である。生徒は情報収集能力，思考力・判断力・表現力，課題解決能力などを総動員して取り組んだ。

② 信頼性の高いデータベース

現状を把握し，課題をつかむために，一人ひとりが新聞を一紙ずつ読み，資料として使える記事を１０委員会（産業，観光，教育，文化，安全，環境，医療，福祉，労働，運輸・通信）のボックスに分類して入れた。

インターネットの情報は，いつ書かれたのか，だれが書いたのか，確かな情報なのかなど，疑問が残るものがある。新聞を使うことで，出典の明らかな，信頼性の高いデータベースを作ることができた。

③　総合的にとらえる

安全委員会は，南海トラフ地震に関する新聞記事から家屋の耐震化を進める必要性を感じ取った。そこで，新聞広告や県のホームページを活用して安心・安全な町づくりを呼びかける政策を提案した。家屋の耐震工事をする場合，家主の経済的負担を軽減するなど，県と県民と工事業者が一体となって，地震に備える政策を提案することができた。

④　自己の在り方を追求する

各紙を読み比べ，情報を得ることで，徳島の「よさ」に気付く生徒が多かった。徳島の未来のために今自分ができることを考え発信することは，自己の在り方について追究することにもつながった。

こうしたＮＩＥの学習により，課題を解決する過程において自ら学習していく能力や態度を養うとともに，豊かな人間性を育むことを目指している。

(2)　ＮＩＥ全国大会徳島大会

８月１日(金)，あわぎんホールにおいて，第 19 回ＮＩＥ全国大会徳島大会が開催され，附属中学校は，前述した「徳島未来構想―模擬県議会を開こう―」を授業公開した。この中で，生徒が 25 年後の徳島について考え，模擬県議会を開いて討議する様子を披露した。その具体例は次のとおりである。

○　郷土革新党の教育委員会は，各教科の授業に防災教育を取り入れることを提案した。南海トラフ地震に備え，防災教育の常時指導の必要性を訴えるものであった。

○　花さか未来党の医療委員会は，糖尿病死亡率の高さを改善するための方策として，食生活を改善する出前授業，「ベジ食べる？運動」などを提案した。他政党からの質疑もあり，多面的な視点からの討議がなされた。

(3)　そのほかの取組（資料１－２－①）

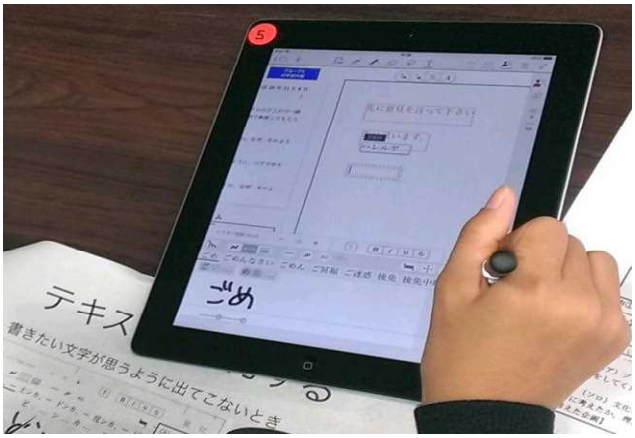
(4)　成果と課題

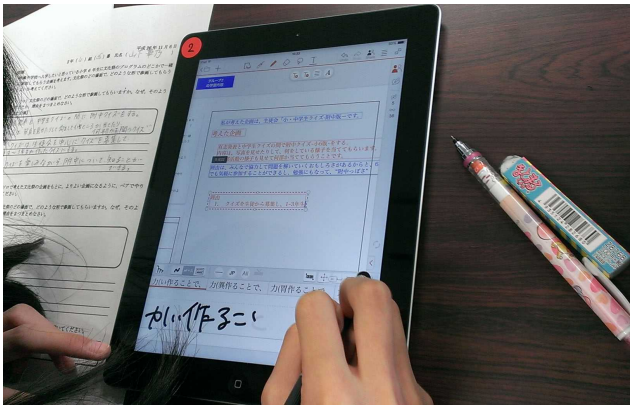
新聞記事に対する感想・意見の記述や表明ができたり，新聞記事を読み比べたりする授業を充実させることができ，それが社会に生きてはたらく思考力等の育成につながった。また，ＮＩＥ全国大会徳島大会（7/31・8/1）において３年生が総合的学習「模擬県議会」を授業公開することにより，それまでの授業を含め，教員・生徒共に適度な緊張感を持って真剣に取り組むことができた。さらに，全国大会の様子や成果がいくつかの新聞に大きく報道されたことで，生徒や保護者にやりがいを感じさせることができた。(資料１－２－②)

今後も，社会問題等に関心をもって新聞を読み，それに対する意見をまとめたり，それを元に家族や友達と会話したりことを通して生活習慣化を目指したい。そのためには，日々の授業において，教員が意識して，新聞の記述を話題にしたり，そこから課題設定したりすることが大切である。

観点１－３　ＩＣＴ機器の効果的な活用

(1)「思考力等を育む学習指導方法」の効果検証方法の開発



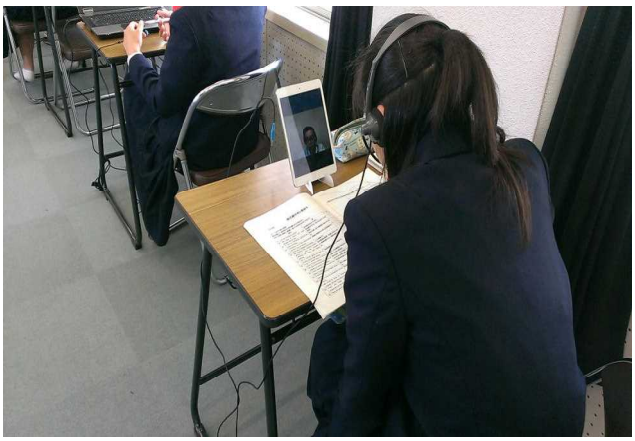


生徒が問題解決に「すべ」をどの程度使っているのか，仲間とコミュニケーションすることでよりよい解決策となっているのか（協働により思考が深まるか）などを検証する手だての開発を，鳴門教育大学　村川研究室に相談したところ，国立教育政策研究所，コンピュータ企業，ソフトウェア企業と連携してＩｐａｄと無線ＬＡＮを活用した先進的なシステムによる検証方法を開発してくださった。

これは，全国学力調査の活用力を問う類似問題を生徒に解かせ，その解答をタブレットに記入させることで検証を行うものである。生徒は，自分なりの解答を記入後，相手を知らされていないパートナーとタブレット上でその解答について協議し，それを踏まえて最終的な解答を決定する。解答から「すべ」が活用されたか，また，最初の解答と協議後の解答の比較からコミュニケーションにより思考が深まったかも検証することができる。

本年度は，２年生全員を対象として，このシステムによる効果検証を行い，すべの活用及び協働により思考が深まることを確認できた。

(2) 外国人とマンツーマンで会話する授業の開発



課題探究学習（２年生総合的な学習の時間における講座選択の授業。主に大学教員が専門を生かした講座を９講座開設し，生徒が受講したい講座を選択して履修する。）において，Ipad を１人１台貸与して，外国にいる講師とマンツーマンで会話する授業を，鳴門教育大学　藤原研究室が開発してくださった。

生徒は大変興味深く学習に取り組むことができた。

(3) 電子黒板，プロジェクターの活用（資料１－３－①）

昨年度，第一理科室に電子黒板を設置し，さらに，本年度は，右のスライド式電子黒板を全ての普通教室に導入した。また，教室を移動して使っていたモニター型電子黒板を美術室に設置した。これにより，動画や静止画を用いてわかりやすく説明したり，生徒のワークシートをクラス全員に示し意見交換したり，英語のデジタル教科書でネイティブ発音を繰り返し聞いたりして，よくわかる授業を展開した。

(4) 無線ＬＡＮのアクセスポイントの設置

普通教室，特別教室，教科準備室など 11 室に無線ＬＡＮアクセスポイントを設置し，タブレット端末を使用した授業を行ったり，教育実習生等が教材研究したりできるようにした。これは，情報基盤センター及び曽根研究室に協力を依頼し，大学の古い機器を無料で貸与いただき，センター職員と附属中教員が協力して設置したものである。

これにより，教育実習生や院生が自作プレゼンを使った授業を展開するなど，ＩＣＴ活用を推進することにつながった。

(5) 成果と課題

ICT 機器の活用により，よくわかる，楽しい授業を展開することができた。また，タブレットを用いた先進的なＩＣＴ活用法を開発することもできた。

課題としては，まとまった台数のタブレットが導入されていないこと，音楽室等いくつかの特別教室に電子黒板（プロジェクター）が設置されていないこと，無線 LAN の設置数及び性能が十分ではないことなどを挙げることができ，さらなる環境整備が必要である。

２　優れた点及び改善を要する点

(1) 優れた点

学校評価アンケート（資料１・２－①）では「先生は楽しい授業となるよう工夫している」94.1 %となっており，２５年度よりも 2.6 %，２４年度よりも 4.7 %高まっている。ほかにも，「先生は生徒が考えたくなる課題を設定している」90.7 %，「先生は実験・実習・実技を充実させている」95.6 %と，多くの教員は学習指導方法及び教材・教具を工夫したと考えられる。

また，新聞記事（資料１－２－②）に記載されているように，NIE にこうした学習指導方法を取り入れたことで新聞記事に記述されている様々な社会問題を生徒一人一人が自分の問題として受け止め，よりよい解決策を見いだしていったこと，また，この学習活動が新聞を通して報道され，「社会に生きてはたらく思考力・判断力・表現力」を育成する授業を地域に普及啓発できた意義は大きいと確信している。こうしたことから新聞記事やニュース報道に興味を持ち，それを話題にして家族と会話している生徒が 80 %以上いる。

さらに，前述した授業はもとより，日々の様々な教育活動にＩＣＴ活用を取り入れることとし，これを進めるために大学と連携した委員会を立ち上げ，大学教員にアドバイスしていただいた。

これにより教員のＩＣＴ機器活用に対する意識が高まったようで「先生はプロジェクター等のＩＣＴ機器を活用している」87.7 %となっており，このことが楽しい授業に結びついたものと推察している。

特に，「すべと生徒の思考」「協働による思考の高まり」といった検証が困難な研究内容，外国にいる講師とタブレットを活用してマンツーマンで会話する学習について，鳴門教育大学　村川研究室,藤原研究室が企業と連携して先進的なＩＣＴ活用による解決方策を開発してくださり，試験的に実施できた意義はとても大きい。この紙面を借りて心から感謝の意を表したい。

こうした取組により，全国学力・学習状況調査（資料１－１－①②）における平均正答率が，主として知識を問う問題，主として活用を問う問題の双方共に全国国立平均を上回る結果となっている。

(2) 改善を要する点

成果と課題において記載した「学習指導を効果的に行うための準備や教材開発に費やす時間及び労力」「生徒が，新聞を読み，思考し，会話することの生活習慣化」「タブレットの導入，特別教室への電子黒板（プロジェクター）設置，40 台以上が同時接続できる無線 LAN アクセスポイントの教室設置」である。

また，全国学力・学習状況調査（資料１－１－①②）の解答を分析すると，活用を問う問題において十分な思考ができていない生徒がいる。資料１－１－①②に明記している国語・数学の手立てを参考に各教科が連携して社会に生きてはたらく思考力・判断力・表現力を育むことが重要である。

３　評価項目の達成及び取組状況の自己評価

以上の内容を総合し，４段階中の「　　」と判断する。

自己評価の基準	Ａ　十分達成されている
	Ｂ　達成されている
	Ｃ　取り組まれているが，成果が十分でない
	Ｄ　取り組みが不十分である

＊　評価項目ごとの自己評価の基準は，以下同じ

評価項目２　いじめの撲滅

保護者と教師，教師と生徒，生徒間において，相手の状況（思い）を踏まえた適切なコミュニケーションを行うことで信頼関係を築き，学校を安心して過ごせる場にする。

１　観点ごとの分析

観点２－１　コミュニケーション力を高める活動の充実

(1) 各教科の授業実践

開発した学習指導方法によるグループ学習，討論等により，生徒のコミュニケーション力を高めている。なお，この授業を効果的に行うために，前述した電子黒板，タブレット，ワークシート，実験装置，ホワイトボード，付箋紙等を活用している。

国語科

徳島の方言を全国に広めよう

徳島の方言を全国に広めようという課題について，「必要である－必要でない」，「できる－できない」を評価し，論理的な構成を工夫して説明する授業実践を行った。習得した知識と調べて得た情報を「分類する」「比較する」「関係付ける」「多面的に見る」等，学習者がすべを選んで思考を組み立て，表現する学習に取り組んだ。

社会科

地方自治と住民参加

対立と合意，効率と公正の視点やさまざまな住民の立場から，地域の抱える課題の解決に向けての政策を提案することをねらいとした。すべ「多面的に見る」を用いて，提案された政策の多面性について評価することを通して，政策を改善する学習活動に取り組んだ。

数学科

図形の調べ方

図形領域において「２つの三角形の面積の大小を比べよう」という課題で授業実践を行った。二つの図形の面積の大小を，すべ「条件を制御する」（底辺の長さを等しくした三角形に変形する）ことで分析し，その方法が正しいことを説明する学習活動に取り組んだ。

理　科

大地が火をふく

「火山の形はどうして違うのだろうか」という課題解決に向けて，火山のモデル実験を行った。実験の前段階で，すべ「比較する」を用いて，思考・判断を促し，仮説を立て，自分の考えを説明する学習活動に取り組んだ。

音楽科

言葉のリズムを楽しもう

「クラスの心と声が１つになる楽しいリズム曲をつくろう」という課題解決に向けて，グループで，楽音構造を特徴付けているリズム・テクスチュア・構成の工夫によって生み出される曲想を解釈し，言葉を素材としたリズム創作を行った。すべ「比較する」を用いて生徒のイメージを呼び起こすことによって，思考・判断を促す学習活動に取り組んだ。

美術科

展覧会を企画しよう

「友達の企画した展覧会のテーマを予想しよう」という課題解決に向けて，グループで相互鑑賞を行った。友達が提示した作品を，形や色彩の相違，共通性，イメージ等に着目し，すべ「多面的に見る」を用いて鑑賞することを通してテーマを予想し，自分の考えを説明する学習活動に取り組んだ。

保健体育科

球技「バレーボール」

三段攻撃の成功を目指した練習の中で，課題を整理し，解決するために仲間どうしで意見交換する活動を行った。個人やチームの状況を比較したり，連携の各場面や個人技能のレベル等を多面的に見たりすることを通して，思考・判断・表現を育む授業実践を行った。

技術・家庭科（技術分野）

あなたはどれを選ぶ？

「机上の紙類を整理するためのレターケースを選択する」という課題解決に向けて，すべ「分類する」を用いて，選んだ根拠を長所と短所に分類することで，社会的，環境的及び経済的側面からレターケースを評価し，適切な解決策を見いだす授業実践を行った。

技術・家庭科（家庭分野）

目指せ！安全・快適生活

「室内環境の危険箇所を見付け，家族が安全で快適な生活が送れるための安全対策を考えよう」という課題で授業実践を行った。すべ「多面的に見る」を用いて，室内環境の問題点を把握して，最適な解決策を構想し，説明する学習活動に取り組んだ。

英語科

”City Life is better Than Country Life.”

「あるテーマについて自分の考えを論理的に話す」という課題について，すべ「比較する」を用いて，他の人の意見と自分の意見の類似点や相違点を分析的にとらえ，生徒の思考・判断を促す授業実践を行った。思考が深まることで，より意欲的かつ論理的に，ディスカッションが展開されることをねらいとした。

(2) 特別活動及び道徳教育の充実

道徳・特別活動の授業で，学習内容・指導法を工夫した。その例として，１年生で実施したアサーショントレーニングを示す（資料２－１－①）。アサーショントレーニングとは，感情的な

表現にならないよう，自分も相手も大切にした表現を習得するトレーニングであり，その場に応じて，自分の気持ち，考え，信念等を正直に，率直に，相手に歩み寄りながらコミュニケーションできることを目指すものである。これにより，観点２－２で述べる「意地悪な気持ち」「相手を不快にさせるような態度や言動」を抑えることにつながると考えている。他学年においても，このようなアサーションの考えを取り入れた特別活動や道徳教育を充実させている。

(3) 成果と課題

普段の授業において，ペア学習，グループ学習が多く取り入れられ，討論，議論，対話等が当たり前のように行われるようになった。これにより，生徒会の弁論，儀式の挨拶等，生徒が大勢の人前で話をするときに，原稿を棒読みすることなく，自分の言葉でわかりやすく説明できる生徒が多くなった。

一方，生活アンケート結果をみると，悪口，陰口，無視等，相手を不愉快にさせる言動が減ってはいるが，なくなってはいない。今後も，アサーショントレーニング等の授業をより充実させていきたい。

観点２－２　いじめに関する調査の実施とその結果を踏まえた取組の充実
（いじめ防止基本方針の遵守）

(1) Ｑ－Ｕ調査の実施

Ｑ－Ｕ調査とは，楽しい学校生活を送るためのアンケート（QUESTIONNAIRE － UTILITIES）である。このアンケートにより，学級集団の状態や，子供一人一人の意欲・満足感などを測定でき，不登校になる可能性の高い子供，いじめを受けている可能性の高い子供，学校生活の意欲が低下している子供などを発見し，早期対応につなげることができる。また，学級全体のデータから，「なれあい型」「管理型」など，集団の傾向をタイプ別に把握することもできる。本校では，昨年度から実施している。本年度は年２回実施することとし，その結果について，鳴門教育大学のアドバイスを得て分析することで本校のいじめ防止の取組効果を検証することとした。

なお，６月２６日に本校職員研修会の講師として大学教員に参加していただき，Ｑ－Ｕ調査結果の分析について指導助言を得ている。しかし，年度末調査結果については本評価書作成時点において分析が間に合わなかった。

(2) 生活アンケートの実施

７月９日と２月２日の年２回，生活アンケート（無記名調査：資料２－２－①）を実施し，いじめの実態を調査した。また，このアンケートに「今もいじめが続いているなど，悩んでいる人は，先生や家族など，身近にいる大人にすぐ相談してください。」と記述し，教師や保護者への相談を促した。

(3) いじめの実態把握と対応

前述した調査はもとより，休み時間の見回り，部活動指導，日記指導などにおいて，生徒とコミュニケーションする中で，教員と生徒との信頼関係の構築に努めている。このような中，生徒の自発的な訴えによっていくつかのいじめの実態を把握し，解決している。

(4) 保護者啓発

４月１９日に開催した保護者参観日における各学年懇談会において，「学校いじめ防止基本方針（資料２－２－②)」及び「いじめのサイン発見シート」を配布した。また，「いじめ防止対策推進法に基づく本校の対応について（資料２－２－③)」とほぼ同様の保護者啓発資料を入学説明会及び保護者参観日に複数回配布した。さらに，本校ＨＰより，いじめに関する啓発資料を掲載した。

(5) 生徒会活動の充実

本校の課題は「暴力を伴わないいじめ」であり，その特徴や対処等については，文部科学省国立教育政策研究所「いじめについて，正しく知り，正しく考え，正しく行動する。(平成２５年７月)」に述べられている内容がよく当てはまっており，本校の基本的な考え方となっている。次の記述は，その抜粋である。

「暴力を伴わないいじめ」の発生実態というのは，例えて言うなら，「風邪」のようなものなのですから，予防が一番なのです。・・・・いつでもどこでも起きていて，その多くは数日もすれば自然に解消し，本人もそれと気づかない場合すらある。ところが，「たかが風邪」と侮っていると，それがこじれて肺炎になり，時には死に至ることもあり得る。それが，「風邪」です。いじめも，元々は些細な行為なのに，気づかないまま放置すると，時に急速にこじれ，取り返しの付かない事態にまで進むことがあります。特に，しつこく繰り返されたり，みんなから集中的にされたりすると， 深刻な精神的ダメージをもたらします。・・・・まず取り組むべきことは「未然防止」です。子ども同士の日々のトラブルが減り，相手に対する意地悪な気持ちが減り，仮にそうした事態が起きても相手を不快にさせるような態度や言動を抑えられるなら，「深刻ないじめ」にエスカレートすることはなくなるからです。・・・

こうしたことを踏まえると，生徒一人一人が人権感覚を磨き，いじわるな気持ちを押さえるなど自らいじめをなくそうとする取組が何よりも大切である。そこで，生徒会担当教員がこうした内容を生徒会に伝えたところ，昨年，本校生徒会は，未然防止の手だてとして「君を信じよう・君に伝えよう・自分を変えよう」からなるいじめ撲滅宣言「なかよしの宣言」を打ち出し，全校集会で宣言するとともに，朝の挨拶運動時に広報活動を行った。この活動は写真のように本年も引き継がれている。さらに，本年度の生徒会は右の写真のように葉っぱ一枚一枚に友達のよいところを記述した「なかよしの木」を玄関ホールに掲示した。

(6) 生徒指導委員会の開催

本年度から新たに生徒指導委員会を開催することとし，管理職，スクールカウンセラーも交えてよりよい指導法を協議した。

第１回生徒指導委員会（平成２６年４月２日開催）

第２回生徒指導委員会（平成２６年８月７日開催）

(7) 成果と課題

この調査により，いじめの実態を把握すると共に，年度初めと年度末を比較することで取組の効果を検証することができた。また，こうしたことによりいくつかのいじめが生徒から打ち明けられ，ほぼ解決することができた。生活アンケート結果においても調査項目のほぼすべてにおいて，大幅にいじめ行為の訴えが減っており，いじめ防止の取組の効果が表れている。

ただし，その解決に当たっては，被害者・加害者と面談し双方の言い分をすりあわせたり，保護者の理解を求めたりすることが重要となっており，教員がカウンセリングマインドをしっかり持つこと，面談時間を確保することが課題となった。

２　優れた点及び改善を要する点

(1) 優れた点

学校評価アンケート（資料１・２－①）では「先生は，生徒の考えをまとめたり，発表したり，生徒同士で協議したりする学習を多く取り入れている」95.8 %と，ほとんどの授業でコミュニケーション力を高める授業を展開したと考えられる。また，「生徒は互いに相手の思いや立場を踏まえて会話している」88.5 %と，アサーショントレーニング等の効果が感じられる結果となっている。さらに，前述したように生活アンケート（資料２－２－①）においても調査項目のほぼすべてにおいて，大幅にいじめ行為の訴えが減っている。こうしたこともあって「生徒は楽しい学校生活を送っている」94.4 %となっており，ほとんどの生徒が楽しい学校生活を過ごしている。

このような良好な状況となった要因として，本校保護者の方々が高い人権意識を有し，適切な家庭教育をしてくださっていることが挙げられる。アンケートにおいても「家庭で相手の立場に配慮した言動を指導している」94.1 %，「保護者は本校の学校いじめ方針を理解している」84.1 %となっている。また，教員が適切な言語活動を行って生徒の手本となることが重要であるが「先生の言葉遣いやマナー，電話などでの応対はよい」95.8 %となっており，おおむね良好であったと言える。

(2) 改善を要する点

国立教育政策研究所「いじめについて正しく知り，正しく考え，正しく行動する。（平成 25 年 7 月）」には次のように記述されている。

今回の報告書も含め，繰り返し指摘しているように，「暴力を伴わないいじめ」はどの子どもにも起こりうるものであり，しかも大半の子どもが巻き込まれるものだからです。半年間で４～５割以上が加害経験をもつばかりか，次の半年にはかなりの部分が入れ替わる。言葉通り，誰にでも可能性があるわけなので，全員を対象に教育を行えばよいわけです。

生活アンケートによると，現在，いじめを訴えている生徒がいる。上の記述に基づくと，いじめをなくすために最も大切なことは，生徒一人一人が，日々，相手に配慮した言動ができることである。そのためには，特別活動及び道徳教育を要として，さらに生徒の人権感覚を高めていく取組が重要と言える。従って，今後も，本年度取り組んだコミュニケーション力の育成等をより推進するべきであると考えている。

３　評価項目の達成及び取組状況の自己評価

以上の内容を総合し，４段階中の「　　」と判断する。

自己評価の基準	Ａ　十分達成されている
	Ｂ　達成されている
	Ｃ　取り組まれているが，成果が十分でない
	Ｄ　取り組みが不十分である

＊　評価項目ごとの自己評価の基準は，以下同じ